

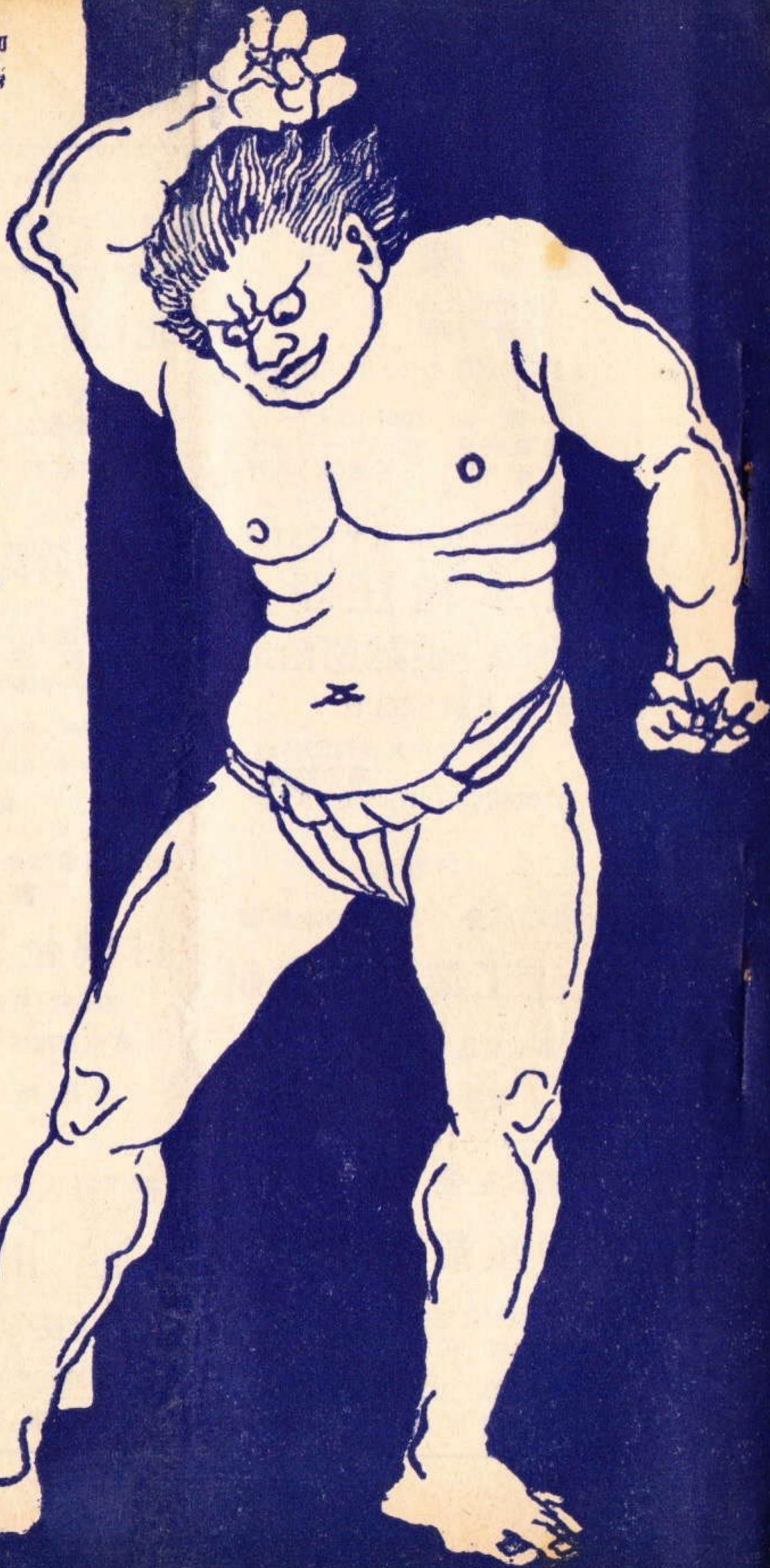
昭和28年 3月23日 第3種郵便物認可
昭和22年11月1日発行(毎月1回発行)
「野人の叫び」通巻 第192号

主幹 田川義介

野人の叫び

若木 夕子 監

十一月号
第十七卷
第九十三号



道益トラック・連道コ
ンペアー 製造発売元

道益株式会社

取締役社長 川 滝 信 吾
専務取締役 田 中 汎

本社 東京都中央区日本橋大傳馬
町2ノ1

電話 (66) 1147~9番
支店 札幌市 北三西一 (中央織
維内) 電話(3)4276番

ベニヤ材品

ラワン合板・ラワン各種製材
桧目合板・北海道産製材
特種合板・木材人工乾燥室完備

北見綜合木材株式会社

会長 熊沢助三郎
取締役社長 熊沢秀円

電話 (76) 0229

先ず健康!!指圧を受けて

日本指圧学校

校長 浪越徳治郎

治療と講習毎日

東京都文京区表町55番地
(傳通院前)
電話小石川(92)0787番

山本公認会計事務所

公認会計士
所長 税理士 山本 吉雄
自由学園講師

日本橋事務所 東京都中央区日 橋橋川 0番地
電話茅場町(66)1059 7476番
江東事務所 東京都江東区深川永代1丁目4
(永代橋際)
電話深川(64)3081番

ステンレス製品

本邦の草分 社長 杉本重蔵

大江工業株式会社

東京都品川区大井南浜川町

電話大森 (76) 1450番
1552番

通商産業省許可ガソリン計量機
製造発売元

日興企業株式会社

取締役社長 日光直太郎

東京都港区芝三田四国町2の1
6448
電話三田(45)1946
8821

取締役社長 綱中 政吉

綱中産業株式会社

本社 東京都江東区深川佐賀町1ノ10

電話深川(64)0360~2

工場 東京都江東区深川佐賀町2ノ1

電話深川(64)7820番

祝「野人の叫び」の御発展

芥川商店

店長 芥川 典

東京都港区芝田村町1丁目4番地
(東邦ビル2階)電話東京(59)局1904番

卷頭言

称好と萬恩

品川義介

今上天皇陛下の師伝として、帝王学を授けられ、近世一代の高徳達試であつた、故梅剛杉浦重剛先生の学堂を、称好塾と呼んで居つた。

その出典は『後漢書』にある、司馬徽の故書によるものだ。彼の字名は徳操と云い、潁川の人であつた。性来人の短所をあばかず、欠点を問はず、悪事を語らなかつた。何でも『ああ！好し好し、結構々々』と嘆美称讚するのみであつた。或る時友達が彼の病床を訪れると、いつに変わらぬ上機嫌のニコニコ顔で、ああ！よかよか！と手を叩きながら、恰も病を楽しんで居る有様であつた。其の際友人の死去を耳にすると、彼司馬徽はこの外喜んで『それはまた御目出度い事だ。結構々々！好かつた好かつた！』と、さも嬉しそうである。するとこの有様を見てとつた妻君が『まあ！あなた ひどいではありませんか、御友達が、御死になつて、一体何が好かつたのですか、失礼な！』ときめつけるや、彼はそらとほけて『ウン！御前さんの言う事は更に好し』と答えたそうである。蓋し『人に答うるに、只好しと称す』てふ文句の中から、杉浦先生はその二字を盗んで、称好塾と名づけられたものだ。さて我が野人庵は、他に白雲荘と云い、醉夢庵と呼び、且つ万恩郷と唱えて居る。然もこの万恩郷は、すべて万づの恩沢に謝する意味で、自分に幸福が与えられた時には勿論、天恩の優涯に感謝すると共に、同じく、災害を賜つた場合にも、神意の何辺に存するかを味い、その深き恩寵を感謝するのである。野生の腰折れにも、『世の中は、感謝感謝で、おくらばや、感謝の外に、ことしあらねば』と云うのがある。思うに有難いと云う感謝感恩の言葉の真意は、読んで字の如く、実に難有りの義である。古聖は『吾れともしきに因りて、之を言うに非ず。そはいかなるさまに居つても、それを以て足れりと、する事を学べばなり。吾は貧しきに居る道を知り、また富に居る道を知り、飽く事も、飢ゆる事も、豊かなる事も、ともしき事も、すべての事に於て、吾これを熟練せり』と、もう人間も此所まで来れば、実に天下泰平で、貧乏もよし、病氣もよし、天災もよし不運不吉更に好しで、只余す所は感謝感恩の感激と、光榮に浴するのみ。孔夫子言わずや。『君子はその身分に安んじて、その外を願わず。富貴にあつては、富貴の道を行い、貧賤にあつては、貧賤に安んじ。患難にあつては、患難を楽しむ。君子に入るとして、自得せざる事なし』と



見聞読考録 山梨県紀行

品川義介

北満州露満国境に位する、黒竜江河畔の黒河市街に於て、不可思議な因縁で、惘慙となつた知友！我が大兵肥満二十八貫居士、三森得平君がこの度、自家用車を手に入れたから、吾等夫妻を積み込んで、君が故郷の山梨県勝沼町へ、飛ばそうと云う。

さて勝沼は日本名題の、所謂葡萄の名産地であり、且つ近郊の昇仙峽は、天下の絶勝であると、會て聞いて居つたから、自然と口目の遊意は頻りと動く、時しも天は高うして、馬肥ゆるの期！、いでや好機は逸すべからずだ。『ヨシ！来た！面白い。大いに行こう』と、立所に話はまとまつた。然し家妻はハイヤーに、至つて弱い為め、三森夫人照子女史と、列車の便をかる事とし、一足先き

に出発した。そして僕達は翌九月廿二日午前三時頃、両三人同車して、まつくらやみの新宿筋から、道を甲州街道にとつて、一路驀進した。時余に暗澹たる、武蔵大平野を通り抜けて、忽ち峻険な山道に差しかかった。

蓋し山梨県は山無し所か、大いに山有りて、全く摺鉢の底に当る国である。然らばこの大山道は、恰も其の摺鉢のふちに當つて居る。然も自分達が進んで居る急坂には、彼の中里介山の小説によつて、有名になつた、大菩薩峠や、小仏峠や、笹子峠の三大険難が横たわつて居る。よつて吾等が自動車も、其の難関を攀じ登つて来た筈ではあるが、昔ならともかく今日で

は、蜿々蛇の如き山道を、居眠り半分に、車前の触光で照らしながら、大きなうねりの坂道を、上下するを覚ゆるのみであつた。かくして午前五時半過ぎに、うすらあかるくなると、白雲去来の黒ずんだ、群峯の山麓にあたつて、美しい相模湖が、キラリキラリと光つて見える。その内に空は全く晴れ渡り、一路の山道は豁然と開けて、忽ち甲斐盆地となつた。そこで峠の上から見下ろすと、一眸千里の壯観も只ならず、思わず快哉を叫んだ。

かくして下り坂となり、一瀉千里の勢いで飛ばすと、間もなく相模川の上流にかかつて居る天下の奇勝たる、猿橋の畔へさしかかつた。猿橋は実に岩国の錦帯橋と、四国祖谷溪の谷釣橋谷と共に、我が国に於ける三奇橋の一つである。折角の事であるから、一同は下車して、橋上にたたづんで、下を見おろすと、目がくらむ程下に、悠々碧潭を堪えて、清漣掬すべきである。橋の長さは約二十間、そこそこではあるが、峭立してすごみを帯びた、兩岸を自然にたたむ大岩壁は、大小凸凹の石皺と、鮮かな青苔を纏う、乱礁曲折の工合は、ことの外面

白く、且つ谷底より、グングンと延び上つて居る、楓葉と老松とは、正に深緑を堪え、鬱乎蒼々として、一段の風趣を添えて居る。蓋し猿橋の特徴は、実に橋半に一本のささへ柱なく、兩岸壁を穿つて直ちに、大木を差しはさんで、積み重ねられて居るから、雅趣思ふべきである。然もこれはその昔、猿群の谷渡りを、唯一のヒントとして、造営せられたものと、伝えられて居る。再び乗車して愈々、茫莫たる勝沼大盆地へ出た。驚く勿れ！ その全面は、上下左右悉く、葡萄棚を以て埋まつて居る。身をかがめて棚下を覗いて見れば、累々たる千果万漿は、その色合も美しく鈴なりで、地上にふさふさと、ぶら下つて居つた。流石にこれは日本の、名に背かずだ。そして吾等の車は暫くの間、薄暗い葡萄棚の細道を縫うて進み、午前八時過ぎに、漸く勝沼ステーション前の、三森君母堂七十六の営める、大正雜貨商舗に着き、多くの家人に出迎えられ、ここで先発隊の、家妻一行と合流した。何しろ今度の旅行は、突然の事とて僅かに、両三日の予定である。早速一同は賑やかに、好意

の朝食に、啗撃したが、卓上に山載された、各種の葡萄と、いちじくには、些か味覚を驚かした。そして再び車中のすしずめとなり、先ず勝沼銀座を通つて、甲府市に出で、その繁華街を一瞥して、めざす昇仙峽の入口に、下車したのが、午後一時であつた。時は正に中秋とて、紅葉の季節には些か早やかつたが、聳立せる岩峭に抱かれた満山の奇木珍樹の碧葉と、下に激する溪流巖をかむ奔騰とは、正に天下奇勝の一たる、大玄関先の觀があつた。そこで車を捨て、稍進んで小ざつぱりした、朱塗の木橋を右にとつて渡れば、数軒からなる小店街の、客引く声もかまびすしく、それもその筈、今日は珍らしい絶好の遊覧日和で、各地から参集して、遊散する俗客は、恰も黒山の如くに、雑沓を極めて居る。彼等にとつては、又とない最好の書き入れ時である。かくして折角の仙境は、人煙の巷と化せんとして居る。さて此所から約里余四キロの觀景は、実に本峽随一の絶勝である。

そこで吾等は直ちに、田舎式薄汚い、ほろ馬車に乗り換へ、右手は濃緑鬱蒼たる、大深山に蔽われ、

左手には清湍を見ろし、その間を綴るあやしげな小径を、徐々として登つて行つた。眼下の谿流は水早くして清冽！そこに碧潭をつくり、然もその左右前後には、何千万貫とおぼしき、巨大なる奇巖怪石が、恰も竜の如く、恰も獅々の如く、恰も猿の如く、或は蛙の如く、或は蛤の如く、或は富士の如く、或は人間の顔の如き、格合や形態よろしく、転がり重つて居る。然もその谿流を隔てて、超然として乱立せる巖嶂は、幾千仞なるを知らず、老杉古松や楓葉桜樹が、其の間の青苔に包まれて、鬱乎蒼々たるものがあつた。

又途上には大石門あり、底知れぬ空洞あり、数丈の飛瀑は万雷の落つるか如く、殊に幽静陰森なる所に、羅漢寺ありと言う工合で、千変万化！行き交う人々をして口々に、浩嘆の語を吐かしめ、神光は万仞にして、靈氣は遊子の耳目を圧するの慨があつた。

さて昇仙峽の近郊の金峯山は、日本第一の水晶の出産地で名高く、為めにそここの売店には、各種の水晶の加工品が、店頭に列べてある。吾等は記

念の爲め、そのコケシ人形二個を求めた。時計を見れば、最早や午後二時である。些か空腹を思い、

三森君の案内で、最寄の小亭にて昼餐をすまし、もと来し道を通りて、漸く下山して車中の人となつた。さて帰途は道を換えて、春日居村に出で、古色を帯びた古刹に、友人藤谷みさを女史を訪ねた。あまり突然な吾等夫妻の御入来とあつて、女史の驚きや一方ならず、そして招かれるままに、座敷へ通り堂内を一巡して居ると、七十五六の母堂と、夫君真淵氏が出られた。そこで挨拶と閑談を兼ね交じえる事、実に十数分であつた。やをら別れを惜んで、戸外に出づれば、前庭のなつめは珍らしく、正に熟して梢に赤果点々たり、これこそ吾輩の好物で、行き掛けの駄賃に、木をゆるがせば、バラバラと落つる小果二三十個を、口にほうばりながら乗車した。げにあわただしき快興であつた。因みに藤谷女史は、我が国に於ける、隠れたる歴史家で、曾ては二千六百年史の懸賞募集に、一等当選の榮譽を担い、又昭和十九年には論文『仏教の日本国民性に、及ぼしたる影響』で、芽

出度く蘇峯賞を勝ち得たる、日本女性中最大の史学者である。

かくして田舎デパートの、三森大正堂に帰つたのが、実に午後六時頃であつた。直ちに一風呂して俗塵を洗ひ、直ちに夕食の饗応にあづかり、吾等は二階の一室を占領して、心ゆくまで快眠をむさぼつた。翌二十三日は、猛雨沛然として、四顧たりである。直ちにかけて足で朝餐の馳走になり、は濛々焉家人へ慇懃な別れを告げ、午前九時頃雨を衝いて出立した。帰途近郊第一の模範葡萄園を、首をふさふさと棚から、ぶら下つて居る紅玉味云はん延ばして、直接口に入れ舌鼓を打つた。佳見学し方なしである。かくして飽満な腹をかかえ、一筋に山嶽地帯に驀進した。濃霧は厚うして行く手を遮ぎり、白雲は靉靄として連峯を包んで居る。遠望は利かされども、雨中の山嶽亦捨て難しである。我が車は超スピードで、幾山道をうねりくねり、くねりうねつて上つては下り、下つては上る事数次にして漸く富士五湖の一つなる河口湖畔へ出でて

(十四頁へつづく)



山莊を廻る人々 品川義介

合氣道の開山、植芝盛平翁（後編）

さて或る時僕は、神奈川県愛甲郡中津の里に、大川周明博士を訪づれて、

『あなたがこれまで御つき合ひになつた方で、一番感心されたのは、一体どなたですか』と聴いて見ると、翁は速座に『それは伊豆の伊東在に居る、肥田春充老と、合氣道の植芝盛平翁の二人である』と、語られた。植芝の方は勿論よく知つて居るが、今一人の肥田春充と来ては、全くの初耳で、未知の間柄である。そこで直ちに博士から、懇切な紹介状を貰つたが、

その後間もなく、新聞紙上で彼が死去した事を知つて、些か残念に思つた。肥田春充は近世に珍らしい、隠れたる神秘的英傑で、無論学殖もあり、人間も出来上つた、ほんものであつたらしい。殊に僕は彼が死後に於ける、追悼録を一読して益

々、その感を深うした者だ。然も尋ね様と思ひながら、遂に僕が怠慢の結果、折角の偉人に、面接出来なかつた事は、実に千載の恨事である。さて話は飛んで行くが、元の関脇天竜はその著書である『相撲風雲録』のなかで、次の様に述べている。『自分は満州国武道会常務理事、角道部委員長となり、その主任師範となつた。人間は弱いものでもうこうなると、つい高ぶりが生じ、自惚が出て来るものだ。私も御多分にもれず。空うそぶいて居た時に、恐ろしい経験が降つて来て、そうしたことやまくれた料見は、ふつ飛ばされて仕舞つた。それは昭和十四年の四月、満州国主催で、当時の日本武道界の達人を招聘して、武道大会を開いた事がある。その時自分は五尺足らずの男と、試合をする事となつた。そこで、「何！この老ぼ

れ小僧奴」とたかをくくつて、かかつていった。それが実に合気道の大家植芝盛平先生であつた。矢早に飛びかかつてみると、老先生の腕が私に触れるや否や、忽ち身心が悩乱して、ぶつ倒れて仕舞つた。「ウンこれは大したものだ」と思い早速弟子入りをして、その翌日から猛稽古を願つた所が、その苦しさは法外で、とても相撲等の比ではなかつた。そして入門六日目に、私はとうとう目をまわして、縮み上つてしまつた。もとより合気道の、何物かは和らなかつたが、その時日本武道の崇高さと、底の知れないものすごさに、心の底から驚かされた。そして年をとれば、人間の体力は衰えるが、却つて精神力の方は、年とともに錬磨され、円熟の境に入る事を悟つた。』と書いて居る。

さて大正八年以来、丹波の山奥で精神的に磨きをかけた、植芝盛平である。時將に逞しい体とすばらしい精神力を持つて居つた。よつて大本教総裁であつた出口王仁三郎は、来る人々に『俺の所にはどえらい武道の達人が居る』と吹聴したものだ。所が当時大本教本部には、あのスケッチブックの齣

訳で、有名になつた神靈学者の、浅野和三郎が重きを為して居つた。然るにその兄貴に当る、海軍中将浅野正恭が、弟の和三郎から、彼盛平の噂を聞いて感心し、その道場を尋ねた事が、きつかけとなつて、茲に海軍との関係が開かれた。その頃から彼の名が世間に知られそれからそれへと聞き伝え、云い伝えに、各種各様の人間が、彼の茅屋をさがして、たかり集うたものだ。その中の変り種には、宮崎白蓮等も居つて、彼女は植芝の大のファンの一人であつた。かくして植芝盛平の人氣は、自然に高まつた。大正十四年には、往時の海軍大将竹下勇が、友人の浅野正恭から、彼の達人振りを聞かされて感心し『そんな武道の大先生を、丹波の山奥で埋れ木にさしてたまるものか』と、矢継ぎばやに出京勧誘の手紙を出し、又使を立てて上京を促す事、実に五度に及んだ。こうなつては流石の盛平も、人生知己に感ぜざるを得ない。それから間もなく植芝が、時々上京するとなつた。竹下將軍の喜びも一方ならず、早速実業家の梅田潔に紹介すれば、梅田も一見しただけで、同気相求め

肝胆相照らして、熱烈なる後援者となり、先づ梅田邸を開放して、仮道場にあてたものだ。その後彼は森村市左衛門邸に、稽古場を移して、合気道の並及に努めた。その頃である。竹下大将の紹介により、海門の大御所山本権兵衛伯が、植芝の名演技を見て、全く心を奪われたが、特にその槍術の美事さに至つては、思わず嘆声を張りあげた。それ以来山権伯は時々、カステーラを手土産に、御嬢さんや俵を伴うて道場へ通う英姿が、そここの街道に見受けられたものだ。かくして植芝道場の人気は沸騰して、海軍の諸将を初め、各階級の名士が怒濤の如く、押しよせて来た。青山御所等も、側近護衛の任に當つて居る、舎人の中柔道五段以上の者のために、廿一日間の、講習を開いたものだ。

その内に彼は、昭和二年の新春、決然綾部のねぐらを離れ、一家総揚げで東京へ移転した。すると直ちに島津公爵が邸内の玉突場を改修して、植芝に提供された。然もその当時は竹下大将、島津公、山本伯の令嬢達も、髮武者の猛士連の中に、入り交じつて居つたから、裂帛の掛声中にも、一

種の清らかな、やわらか味が漂うて居つたものである。

昭和三年の初めには、慶応大学に關係の深い、内海勝二男爵邸内の借家に移動した。当時の門弟の顔ぶれには、竹下勇大将を始め、山本英輔、高橋三吉、百武源吉、蓮沼蕃、近藤信竹等その外陸海軍の将星及び、政界財界の知名の大物連が、かなり多かつた様だ。また高橋三吉が宰する海軍大学へ、彼盛平は武道教師として招聘され、教官や学徒に、合気道を仕込んだものである。その頃の植芝盛平の心境や、群がる門弟共の様子に就いて、現在の道場長たる子、植芝吉祥丸の新刊『合気道』の中に、次の如くでて居る。

『山本権兵衛伯の令息、清氏の世話により、芝白金猿町の借屋に落ついたのは、昭和二年の春であつた。父は月謝と云うものを、絶対に弟子の手から、直接に取らなかつた。それを知らずに弟子共が、直接父に渡そうとでもすると、忽ち火の出る様な雷が落ちた。だから彼等は、奉書の紙に慰斗や水引きをかけて、そつと神棚へお供えしたもの

である。父の仕つけは相手の身分如何に拘らず、
実は峻烈そのものであつた。その被害者の中に
は、竹下大将、山本英輔、香下玄人、（慶大教授



サボテンの美女に囲れた野人

）中将下条小三郎等々であつた殊に下条中将等は
青竹で叩きつけられた事さえあつた。然し一喝後
の父は恰も水の流れの如く、なんらこだわらず

、全く光風霽月の心境であつた。当時竹下勇大将
の父に対する態度は、実に謙虚を極めて、時に
は師匠の肩もみまでされた。竹下は第四教小手
抑えの術が得意で、在米中は相当な武勇伝を發
揮したそうだ。又山本英輔大将には、よく父が寝
込みをおそわれたものだ。その後新宿若松町の皇
武館道場ができてから、二木謙三博士が朝五時に
なると、道場に現れ寝ている、内弟子の枕もと
を、箒ではいたものだ。上京直後の父は、当座の
小使錢にも困り、内弟子の学生富木謙治から、五
円程たかつた事もあつた様だ。昭和四五年の頃、
当時赤阪靈南坂に、大川周明博士と好一對の志士
で、藤田勇という人がおられた。それが父の演武
に感服し、有力な後援者の一人となり、歌舞伎の
先代菊五郎を初め、多数役者連が集つたものだ。
昭和五年には講道館の嘉納治五郎が道場へ來訪
れ、父の武道を見て『これこそ我が理想とする処の
柔道である』と三嘆久しき及んだ。そして自分の
代りに、講道館より永岡氏が、望月、武田の二人
をつれて、合氣道の練習に來られた。殊に望月は

現在も続けられて居る。かくして入門者は益々ふえて、道場が狭まぐるしくなつた。その念願は漸く叶えられ、昭和六年四月に、現在の牛込若松町の地に、八十畳の大建築が完成されて、皇武館と名付けられたものだ』

さて講談社々長野間清治は、この謹格な古武士の典型とも云うべき、植芝の妙技に魅せられて、自己の道場を改築して、彼に開放し俸の恒に、合気道を鍛錬させた事がある。青年恒が時の天覧試合に優勝してその祝賀会が、伊香保に開催された。その時盛平も招待を受けたが、一般招待者並に待遇したので、彼は毅然として、『師礼をつくさぬ奴に、武道を教える必要なし』と言つて帰ろうとした。そこは明敏な野間清治の事である。直ちにその非礼に気付き、一家を挙げて挨拶に出た。その上改めて、師礼厚くもてなしたが、その後一ヶ月程して、盛平はさつと道場を返してしまつた。その時野間清治は『植芝先生だけは、自由にする事は出来ない』と恐れ入つたそうだ。彼の気骨思ふべしである。その頃力士大ノ里も彼の稽

古を受けたものだ。昭和十五年四月には、合気道本部も財団法人皇武館となつた。初代の会長には竹下勇大將が、選考された。

性来百姓好きの植芝盛平は、武農一致を唱え、斯道の一大飛躍を考えて、その実践を望んで、止まなかつたが、昭和十七年に、茨城県西茨城郡岩間町に、七町歩にわたる、野外道場が実現された。然しその費用は彼が憲兵学校の、指導教授にあつたから、陸軍の後援を得たのと、李王殿下の御下賜金で建設されたものである。そして東京の道場は、嗣子吉祥丸に譲つて、道場長と為し盛平自らは大半、岩間在で心技を練り、時々入京して、若松町の本部に顔を出し、監督指導しながら、現在に及んで居る。

今や植芝盛平の創案せる合気道は、日本各地に十数の支部があるのみならず、アメリカ、フランス、ドイツ、ハワイ、ビルマ、パナマ、ブラジル、ベルギー、スイス、印度等々世界各国に、隆盛を極めて居る。殊にハワイが一番盛んで、会員も二千人以上ある。

植芝翁の言葉の中に、『合気道は一瞬ふれた時には、既に勝敗が決定した時であり、よつてこの道には、試合と云うものがない。試合は即ち死合に通ずる』と云つて居る位だから、道主は容易に他流との試合等はやらないが、時には辞すべからざる場合がある。或る時米国のニューヨークから来た、マンガと云う拳闘職業団の団長で、身の丈は六尺八寸、三十貫以上の大男であつた。帝国ホテルに泊つて居たが、竹下大将の案内で、植芝道場へ見学に來た。そこで彼は盛平の稽古振りを見て、八百長だと断じた。彼は盛平に試合を申し込んだ。

植芝は最初断つたが、どうしても相手方はきかなかつた。竹下大將軍は『仕方がないから、植芝さん稽古してやりなさいよ』と言つた。

そして五尺一寸の盛平は、大道場の真中に立つた。仕度した大入道のマンガが、立ち上るといきなり、パツと両足を揃へて、盛平の胸板を目掛けて、飛び蹴りを喰わした。身のかわしの早い盛平の体が右に回つた。忽ち足がすくわれたので頭

から落ちて、マンガは氣を失つた。

又昭和十五年と云えば、彼が五十九才の時である。その五月十七日に、宮内省主催で、宮中に於て全国武芸家の、選抜試合大会が行われた。各流各種の勝れた、現代の劍豪連が約三十人あまり集つた。会場の正面には、玉座がもうけられ、各皇族殿下も、傍席觀覽と云う、武芸家にとつては、一生一代の晴れの舞台である。合気道では植芝盛平が選ばれて、御召しをうけた。処がその前日になつて彼は四十度近くの高熱で、身動きも出来ないう有様であつた。『陛下の御前で死ぬなら、本望だから俺は出る』と頑張り、門弟の止めるのもきかずに出場する事に決心した。然しその場に於て、植芝盛平に敵する、武道家は一人もなかつから、最も力の強い門人を二人選んで、演武の妙を天覽に入れる事となつた。

人間は何事でも、その道に達すると、芸は道によりて賢しで、植芝盛平位な名人になると、たとひ四十度の熱はあつても、一度び柔道着を身につけて、道場の真中に出て、敵に差し向うと全く病

はふつ飛んで、恰も平常の如くである。五尺一寸の彼は六尺に余る二人の門庁を、手玉にとつて空に飛ばす、すばらしい神技妙術の鮮かき、実に見る目をして疑わしむる慨があつた。陛下の御満足は言わずもがな、盛平一代の光榮に浴したものである。終りに今一度彼が真蹄の抱懐と、道歌の、二、三を記して、筆を止める事にする。

◎ 合氣にて、よろづの力を、働かし、美しき世と、安く和すべし。曰く

『合氣道とは和合の道であり、万有帰一の大精神を根底として動く、肉体的表現大和の至妙境である。』

◎ 美しき、この天地の、御姿は、神のつくりし一家なりけり。

◎ 己が身に、ひそめる敵を、エイと切り、ヤアと物みな、イエイと導け。

◎ 誠をば、更に誠に練り上げて、顕幽一如の、真蹄を知れ。

◎ 合氣とは、愛の力を、本にして、愛は益々榮え行くべし。

◎ 根元の、氣はみちみちて、乾坤や、造化もここに、はじめけるかな。



落穂拾いと

人間巡礼

品川義介

■一面識もなき私のことを、御心に止めて、心配して居つて下され、本当に有難く存じます。難関にブチ当つて、毎日毎日追われ追われの生活ですが、先生の御著を拝見、心読しては、元氣を取り戻して、頑張つて居ります。小生のシジミ貝の如き、小さいカラを打ち破つて、御導き願ひ度く念じます。

富士市水戸島中

小川雅達。

■指匠界の御指南番、浪越徳次郎先生の高弟岩崎まつえ女史は、毎週日曜日には、降つても照つても必ず、東京から出張して、吾等夫妻を押えて呉れて居る。

女史の夫君は八百屋で、毎朝あさ市で野菜を仕入れ、荷車につんで曳いて帰る。後方より女史が岩さん御苦勞様ねえ！押して上げますわ』といたわれば、『御暑

う御座います。どなたか知りませんが、御親切に有難うよ」と云う。「なんだ御まえさん！妾！女房だよ。二十年もつれ添うてまだ妾の声がわからんの！」。「なんだ！てめいかい！この薄ら馬鹿奴めが！」幕。

■先日彼が二十四五の頃から、わしが「こやつなかなかの奴だわいと」睨んで離さなかつた。

「明るい暮らし」主幹の宮川房夫君を訪ねて、御馳走になつて居ると、珍らしやこれも十八年前に別れた、出崎島吉夫人あさ子女史がやつて来て「先生！御迎えにきました。島吉は大阪へ出張中ですが、今晩は妾の家へ泊つて下さいませんか」「ヨシ！来た」と早速出掛けて行つた。先づそのこざつぱりした、邪宅に驚かされた。島吉も中々やりよつたのう！感心！感心！何主人は家庭思いで、よく可愛がつて呉れるつて！それは何より結構々々……」翌朝二十四五才の伴に「御前は俺をおぼえて居るかい」「おぼえていますとも！僕が五つ六つの時でした。隣りの部屋で、先生がの御父さんをひどく、怒鳴りつけて居られましたからいまだに深く印象づけられて居ますよ！ハハ……」さては俺もこの屋の親爺のかたきであつたのか、思えば二十年前の微笑に堪えんものがあつた。兎に角も美事オーケー目出度し目出度しである。

■八月十三日。宮川房夫君や、近く「東京民報」を発売する岡本義雄や、専務の萩原や、三光測器製作所長筑木米次、数人の諸君を連れて熱海の晩晴草堂へ、蘇老漢を尋ねた。折悪しく先生は、一週間前から臥床中で面会謝絶である。実に残念であつたが、何しろ一行十人の客人である。すると世話役次女孝子女史と付添看護西野女史……同女史は、既に幾十年も、老先生の御側につき、一生嫁入りもせず、したすら奉仕的看護の任に當つて居らるる、云わば日本国宝の陰れたる管理者である……。と御兩人の氣転で、せめて先生の寝顔なりともと、全員を静かにその寢室に案内された。事は誠に有難く、一同には大満足の色がみえた。かくして吾等は十一時頃、徳富家を辞し、駅近くの小亭の二階に陣取り、簡単に腹を拵えて帰つた。

■九月四日出発の際、思いも掛けぬ御夫婦の御見送り感謝に堅えません。コペンハーゲン、ベルリン、フランクフルト等、各地を経て只今西独のヂュゼルドルフに居ります。昨日はライン河下りを致しました。若者達は勿論ちいさん、バアさん達までビールを飲み、例のラインの唄を合唱して居りました。帝国劇場で唄わせた様な、見事な合唱でした。田舎の純朴な人が多い様です。明日はパリに向う予定です。

欧州の一角より品川先生へ。

▲山本吉雄

■十月十五日僕が二宮のザポテン商磯村貞雄邸が行つて居ると家妻から電話で、客人夫婦が北海道より来て居ると。すぐ帰つて見ると、二十年前に別れた、野沢



高松宮と印版屋小僧上りの藤田正重

印版所に働いて居つた小僧君の藤田正重であつた。これは珍客。だ彼は今年五十五才の紳士となり、野沢印版所の後釜にすわり、今日では四十名以上の職工も使い、繁昌を極めて居る。無学な彼としては、実に立志伝中の男だ。喜び云わん方なし。藤田は曾て高松宮御来道の節は、共に写真をうつす光榮に浴したと。

■十月十四日味の素会社故堀工場長未亡人芳子女史来

遊。同女史は僕の従妹陶村園子の親戚なれば、遠縁とも云うべきか。どうも吾輩の縁者には、精神的文化人がないが、まあ女で少しわかりそうな奴は、園子芳子の兩人のみ。

五頁よりの続き

山中湖に進み、一望千里富士山麓の大観に接した。それから快車一鞭道を吉田口から、厚木に取り、平塚銀座を疾走して、藤沢に着き、我が野人に帰つたのが、実に午後三時半であつた。嗚呼樂しかりしこの紀行！案内役にその人を得て、車中各所の説明にくわしく、茲に謹んで我が三森得平君に謝意を述ぶ。

■十月二十三日午後一時より、新宿区

戸山町四ノ六五六の三光測量器

製作所で、約数十名の工員に、

筑木米次所長の司会で、一時間余

人間学を説いた。

その後三森夫妻に伴われて、

深川の邸に泊る

謹告

『野人の叫び』も独力茲に、十八周年の春を迎えんとして居ります。

就いては十一月の末に当つて、一書を呈します。誠に相すみませんが、誌代御未納の方は、幸に老骨の全国的教化策後支援の思召しで、振つて御助勢下さい。

何卒よろしく御願ひ申上ます。

敬白

昭和三十三年十一月一日

野人 品川 義介

妻 品川 貞子

外 同人

野人 品川義介著

推薦者

大内 兵衛、徳富猪一郎、久原房之助
友松 円諦、宇垣 一成、市川猿之助
大川 周明、浜本 浩、福本 和夫
徳川 夢声、浪越徳治郎、川上丈太郎

人生四十八手

注文殺到！ 三百頁以上の一大雄篇

定価 貳百八拾円

郵税 五拾円

振つて御注文下さい。野人社で御取り次ぎ致します。

私の署名をして……………藤沢市緑ヶ丘野人社へ

競馬はいつも!!

第一通信

主幹 徳永元樹

東京都大田区調布
嶺町二ノ五九

寫真レンズ製造
各種光學レンズ

宮本レンズ

研究所

所長 宮本豊字

東京都品川区大井南浜川
町一六二六
電話大森(76)〇八九七番
振替東京一〇〇六〇七番

全国菓子大博覧会総裁党受賞

日本一の

花王ドロップ 花王キャンデー

社長 道祖土進一

本社 東京都墨田区緑町2ノ11
電 (63) 2585

月賦のデパート
十ヶ月払い。洋服、家具靴鞆、
婚礼道具一式

第一百貨店

社長 松崎 一郎

大井三ツ又角

電話大森(76)0,381
0,927

支那三千年の伝統

一貫堂指戟療院

院長 三森 得平

新宿区大久保一ノ四五六

電話四谷 (35) 0780

小兒麻痺
高血圧
中風
胃腸等

趣味と実用の
染織と洗張り

永浜染織

株式会社

取締役
社長 永濱 益一

平塚市南仲通一三二八
電話平塚七五一番

幸福を招く印章

日光堂

小林 茂

東京都文京区金富町五五
電話小石川(92)三七一一

祝 発 展
全日本競馬研究組合

代表 蔵正男重樹
糸 一治元
山藤柳 永
樹加青原徳

只一筋に常時適品を充実し薄
利率仕の合理化へ

株式会社丸正

社長 中沢 信三郎
東京都中央区日本橋堀留町 1ノ11
電話 茅場町 (66) 1161 (代表)

営業品目 京呉服、関東織物、小
巾綿布、廣幅服地
登録 (特選品) ミクラセル、みそぎゆ
かた、エレガン綿紗
パーリープリント、

日本観光旅館連盟指定旅館
日本交通公社協定旅館

洋和室 富士ホテル

社長 広安与三右衛門
横浜駅より自動車で4分
東神奈川駅西口前
前横浜市神奈川区西神奈川町 2~35
Tel 横浜 49 局 9 3 4 5. 9 3 4 6

株式会社 駿河銀行

藤 沢 支 店

話 電 藤 沢 3067.3068

低溫風力乾燥機貯売所

株式会社 一誠社

社 長 一 井 由 藏

埼玉県飯能市本町大字飯能 100
電 話 飯 野 6 6 5 番

進 相 用
通 信 用 コンデンサ製造
其の他各種

二井蓄電器株式会社

代表取締役 田中真三郎

本 社 東京都港区芝田村町1~2
(第一物産株式会社内)
営業所 東京都品川区大井寺下町1442
及工場 電話 (86) 8111~4
大 阪 大阪市北区西扇町 3
営業所 電話 (34) 9497
九 州 福岡市住吉横田町 936
出張所 電話 (3) 5380

株式会社 日本堂時計店

社 長 佐 川 久 一
東京都中央区銀座 4 丁目
(交叉点前) 電話 57 5511~8

屋号梅源商店

菓子製造卸問屋

店 主 鵜飼 広次郎
東京都台東区浅草芝崎町 1ノ13

幾億万の細胞が甦り、全身
活力が溢れる。360年の伝統！
村上スツボン本舗

スツボンとスツボン血胆錠

東京都台東区下車坂町 2
電 話 (84) 1902

昭和二十八年三月二十三日
 昭和三十三年十一月一日
 第三種郵便物認可
 発行(毎月一回一日発行)

金星工業株式会社

営業品目

高級ステンレス鑄物、鋁、棒、
 線、引抜パイプ熔接管、熔接棒、電
 熱線、電熱帶、電熱対、厨房機械器
 具、冷凍機及部品設計製作

社長 山田了介

東京都港区芝田村町一丁目五番地
 電話東京 (59) 8 5 9 6・8 5 9 7

東洋精糖株式会社

営業所

東京都中央区日本橋小網町2ノ4

本社

東京都江東区深川猿江町2ノ8

本社 電話(63) 7 1 9 1
 7 1 9 2
 7 1 9 3



精粉器製造

奈良機械製作所

社長 奈良自由市

品川区大井鮫州町八〇
 電話 (49) 0525
 1151
 1152
 2054

国家検定消防庁消火器

東邦化学産業株式会社

取締役社長 川滝 市二

東京都港区芝田村町
 一丁目四番地
 電話銀座 (59) 一五三三二
 一五三三三

昭和三十三年十一月一日 発行

定価 一部貳拾円 (送料共)

年貳百參拾円

藤沢市大鋸町一三二六番地

野人の叫び社

発行所 品川 義介

電話藤沢二七一二番
 振替横浜二〇〇九番

東京都港区芝田村町六ノ四
 印刷所 日興社印刷所

電話 (43) 七三九二〇
 七三九二〇

「野人の叫び」 通巻第百九十三号